

書 評 稲 垣 良 典

Thomas Gilby, O.P. THE POLITICAL THOUGHT OF
THOMAS AQUINAS. (英国版表題 PRINCIPALITY AND
POLITY) The Universtiy of Chicago Press, 1958.

本書は *Between Community and Society. A Philosophy and Theology of the State.* 1953 の続篇をなすものであり、前著においては歴史的関心が第二次的なものであったのに対し、本書の特徴はトマスの政治思想を歴史的な枠の中で理解しようと試みている点にある。更にこのことと関連して、トマスの思想的発展の過程を、自然法、政治的権威、共通善、正義および衡平、等の諸概念に関してあとづけようとする努力がなされている。

トマスの思想がそこで育った土壌ともいうべき思想的遺産および時代環境は神学的（特にアウグスチヌスを中心とする神学思想の伝統）法律的（教会法および市民法学者によって継承、発達せしめられたローマ法思想）文化的（13世紀ヨーロッパの社会的条件、文化の特色、慣習、およびトマスが属していた修道会に特有の団体生活観）および哲学的（あらたにヨーロッパに導入されたアリストテレス哲学）の四項目に分けて考察されている。本書の第一部はこれら各項目についての、実証的研究に基づく概観であり、第二部においてはトマスが如何にこれらの影響を受容し、そこから彼自身の思想を發展させたかが論じられている。本書において取扱われている興味ある問題は数多いが（例えば主権、連帯性、衡平、*ius* と *lex*、ドミニコ会々則と近代立憲政治思想との関連、等）ここでは二、三の中心的な問題をとりあげることにする。

最初に政治思想史におけるトマスの位置についての全般的評価を見よう。著者はトマスの政治思想を政治的アウグスチニズムからアリストテリアニズムへの推移（ある意味ではこの二者の総合）として特徴づける。それはより具体的にはトマスによってあらたに導入され確立された次の四つの政治学原理によって表現される。(1)政治的権威の支配ないし命令権は人間性そのものに内在する社会的要求に基づき、積極的価値を持つものであって、単に人間の欲求が原罪によって墮落したことからして(*propter peccatum*) 要請されるものではない。(2)この権威は教会の権威から区別され、自らの領域に関する限り後者に従属する責務はない。(3)世倫的権力が直接に関与するのは外面的な秩序の確立である。(4)政治および立法的機能は、倫理から分離されるので

はないが、直接的には技術の性格を持ち、相対的自律性を有する (xxi~)。

アウグスチニズムという言葉は主として(1)において批判されている立場を指すのに用いられているが、同時に人格の究極的価値の強調、永遠法思想、等を指すこともあること、またアリストテリアニズムも多義的に用いられていることを指摘しておく。更に著者は結論においてトマスの政治思想が歴史の方向決定についてはあまり大きな影響力を持たなかったこと、16世紀のスペインの神学者、特にヴィトリアの著作を通じてその声価がたかまったこと、等に言及しているが (312~)、そこでフーカーの名前が挙げられていないのは理解に苦しむ。

次に著者は、トマスに到って始めて政治ないし実定法に固有の領域が倫理と区別されて存在するという事実が認められ、政治学が独立の学として成立した、と主張する (166, 315)。この主張を論証する為に(1)自然法と実定法(2)共通善と公共善(3)倫理学と政治学(4)技術としての政治、等の問題についてのトマスの立場が考察されている。(1)実定法は自然法から、あたかも原理から結論が引き出されるように、もしくは一般的なものが特殊の規定をうけるような仕方でも導き出されるのであるが、通常実定法と呼ばれるものはこの第二の仕方でも導き出されるものに属する。この場合、特殊の規定たる実定法が倫理的原理である自然法に反してはならないことは勿論であるが、それらは予め後者のうちに含まれているのではなく、また特殊の規定は単に演習によって導き出されるのでもないことが重要な点である (169)。更にこの両者の妥当の仕方にも相違がある。すなわち、自然法においては、あることはそれがそれ自身において善であり正であるが故に命令されるのであるが、実定法にとっての直接の妥当根拠は成果、便宜、効益であり、それが直接に目指すのは効用善 (bonum utile) である (138, 160, 169, 171)。したがって実定法の制定、適用は倫理学者の仕事ではありえない。すなわち、自然法は人間理性がある型の行為を要請するということからして直接に確立されるのに対し、実定法は多様な偶然的条件、将来の利害、等を考慮した上で何らかの補助的規定を決定しようとする、人間意志の働きを通じて間接的に確立される (111, 136)。(2)すべての人間にとっての究極的目的としての共通善と、政治的社会的直接的目的としての公共善とが区別される。著者によるとトマスの共通善概念には (a) 神学的 (すべての人間による神的至福の分有) (b) 社会的ないし政治的 (すべての市民によって享有される全社会の健全な状態) (c) 法律的 (すべての法律遵守者が期待する社会の外面的秩序の確立) という三つの階層が区別されるが、このうち政治的権力によって効果的に実現できるのは(c)すなわち公共善である(129~, 176~, 189~)。公共善が超越的な共通善に秩序づけられており、政治は究極的にはすべての人間における全き人間の生活の実現をめざすべきものであり、この二者が分離できないことはいうまでもない。この二者が分離される時、政治や法は目的ないし原理を喪失して些少なことのみにかかわり、公共善の名の下に人格の権利が脅威にさらされることになる (60, ~93,

～208, ～324～)。しかし逆に言えば、(c)の実現に関しては政治に自律性が認められるのであり、著者が強調するのはこの点である。(v)倫理学と政治学との関係は下屬(subalternatio)概念によって説明される(173, 232)。すなわち倫理学は政治学が前提している諸原理を論証し、その意味で政治学を導くのであるが、政治学に固有の領域、明証については介入せず、また政治学を自らの部分として包括するのでもない。逆に政治学の方から言うと、右のような意味で倫理学に秩序づけられるとはいえ、それが論ずるのは倫理的原理そのものではない。(vi)政治ないし立法は、それ自身においては倫理的に無色な事柄を如何に効果的に処理するかという技術(ars)の性格を持っている。具体的、偶然的な事柄を公共善の推進に資するように処理するということは、単に優れた倫理的理論、倫理的資質を所有することによって可能となるのではない(162, 169)。このような領域を取扱う政治学は、論証の確実さを有する厳密な意味での学というよりは、本質的に実践的、経験的な性格を持ち、観察と帰納とをその主な方法とする(279～)。このようにトマスが政治ないし実定法の領域の相対的自律性を主張しているという解釈は興味深いものであり、何故これらの領域が倫理、形而上学、神学の領域から分離される傾向(法実証主義)があるかを説明するように思われる。しかしながら今日の問題はむしろこの二者を如何に結びつけるかということである。ここからして同じくトマス思想に基づきつつ全人格的立場からこの二者の結びつきを主張するマリタンの如き人の立場も意味があると思う(トマス解釈として問題があるとしても)。

次にこれまで多くのトマス学者によって論じられてきた共通善と人格の問題についての著者の立場を見よう。[同じ問題は共通善と個別善、個人的倫理と政治倫理の項において論じられている(225, 229)。なおこの問題は前著の中心的課題であった。]彼はまずこの問題についてトマスのうちに人格の優位と共通善の優位という一見相反するような二つの主張が共存していることを指摘する。ついでこの問題の解決の鍵は共通善概念そのもののうちにあるとし、特に集合的な意味(個人の善を構成部分あるいは単位として含むような全体の善)と普遍的な意味(各人が人格として直接的、能動的に参与ないし分有する善ないし目的)での共通善を区別することが重要であると述べる。著者の立場は、人格と共通善の間に対立が生ずるのは前者の場合であり(政治的社会に固有の共通善はこの種のものであるから対立を完全に解消することは不可能である)、後者の意味での究極的共通善についてはそのような対立はありえず、したがって問題の解決は人々が前者を如何に後者に秩序づけ、究極的共通善を実現するかにかかっている。本書において著者は、トマスがこの問題について考察を深めるにつれて、前述の二つの主張を如何に調和させていったかを考察している(244～)。この問題に関する著者の所論については別にいうべきことはないが、共通善の内在性と超越性についての説明が充分でないように思う。

結論において著者は、トマスが政治的社会的素材ないし質料因としての自然的衝動的なものを尊重していることを高く評価すると共に、トマスの政治思想の描写に平衡を与える為に、超政治的な倫理的原理および宗教的理想が政治的社会に対して目的因として果す役割を強調している。しかしながらこの結論の部分における政治的社会的諸要素、その発展についての断定的な所論は、前著の構想の要約であるが、種々の問題を含んでいると思う。全体として本書はトマスの政治思想の全般的叙述として極めてインフォーマティブであり、優れた概説書であるといえよう。